

## 現代世界における課題（3）

### 犠牲の論理

## Overview

- 現代における「犠牲」の諸相
- 人類史における犠牲
- 犠牲・殉教の諸モデル
- 犠牲の何が問題か
- 犠牲とイエスの倫理
- まとめ

## 現代における「犠牲」の諸相

- 自己および他者を犠牲にする
- イスラーム過激派による自爆攻撃
- 戦争一般
- 他者に犠牲を強いる論理（→ スケープゴート）
- 反ユダヤ主義
- イスラモフォビア（イスラーム嫌悪感情）

## 自己犠牲の論理

### — ナショナリズムと宗教 —

〔世俗的ナショナリズムと宗教は〕包括的な道德秩序の枠組み、すなわちそれに所属する人々に究極的な忠誠を命じる枠組みを与えるという、倫理的な機能を果たす。（中略）ナショナリズムと宗教がもつ、**殉教と暴力に道德的許可を与える力**ほどに、明確に忠誠の共通様式が現れているものは、他のどこにも存在しない。（マーク・ユルゲンスマイヤー『ナショナリズムの世俗性と宗教性』玉川大学出版部、1995年、28-29頁）

## 人類史における犠牲

- 人類史的な尺度から見ると、動物供犠<sup>くま</sup>を中心とする犠牲の祭儀（供儀）が「宗教」そのものであった。
- 日本、中国、朝鮮半島に事例について、原田信男『神と肉——日本の動物供儀』（平凡社、2014年）を参照。
- 動物供儀と動物供養の違い

## 犠牲の祭儀の諸要素

- 行為：動物など物質的なものを用いる。
- 儀礼：非日常的な作法で執り行う。
- 超越性：犠牲は超越者との媒介と考えられる。
- 交換：犠牲に対する見返り（祝福等）が期待される。
- 変容：犠牲を捧げた者（集団）の変容
- 連帯：超越者と共同体の関係、共同体内部の関係の強化。
- コスモロジー：生の意味づけが宇宙論的に理解される。

John Dunnill, *Sacrifice and the Body*, Ashgate, 2013

## 一神教における犠牲

- ユダヤ教
- バビロン捕囚以前（神殿を中心とした動物供犠）、以降（動物供犠＋律法・言葉）、第二神殿の崩壊（70年以降）以降（律法・言葉）
- キリスト教
- ユダヤ教とのライバル関係の中で、非犠牲（供犠）的な集団として出発。それゆえ、ローマ帝国からは「無神論」的な集団と見なされた。
- イスラーム
- 犠牲祭（マッカ巡礼のクライマックスの日である第12月の10日）では、羊などが屠られる。イブラーヒーム（アブラハム）が息子イスマーイール（イシュマエル）を犠牲にしようとした伝承（Q37:102-107）に基づいている。

## 犠牲・殉教の諸モデル



カラヴァッジョ  
「イサクの犠牲」  
(ウフィッツィ美術館)

## 原点としてのイサク奉獻

神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。

そのとき、天から主の御使いが、「アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」（創世記 22:9-12）

## マカバイ戦争（168年）における 七人兄弟の殉教とその母

それにしても、称賛されるべきはこの母親であり、記憶されるべき模範であった。わずか一日のうちに七人の息子が惨殺されるのを直視しながら、主に対する希望のゆえに、喜んでこれに耐えたのである。崇高な思いに満たされて、彼女は、息子たち一人一人に父祖たちの言葉で慰めを与え、女の心情を男の勇気で奮い立たせながら、彼らに言った。「わたしは、お前たちがどのようにしてわたしの胎に宿ったのか知らない。お前たちに霊と命を恵んだのでもなく、わたしがお前たち一人一人の肢体を組み合わせただけでもない。人の出生をつかさどり、あらゆるものに生命を与える世界の造り主は、憐れみをもって、霊と命を再びお前たちに与えてくださる。それは今ここで、お前たちが主の律法のためには、命をも惜しまないからだ。」（マカバイ記二 7:20-23）

## イエスの十字架による罪の贖い

- 人間は自分自身の罪をあがなうことができない。
- 神がイエスを地上に遣わし、その命（身代金）と引き替えに人類の罪を許す、という贖いの理解が、西洋キリスト教では主流となっていった。
- イエスの十字架に対する解釈の一部が、後の殉教理解にも影響を及ぼす（→ 殉教の美化）。

## イスラームにおける殉教

**ジハード**（神の道における奮闘努力）において、死して信仰を証すること。クルアーンでは、殉教者（シャヒード）はアッラーの祝福を受け、おおいなる褒美を与えられると述べられ、ハディースでも来世での至福が約束されている。（『岩波 イスラーム事典より』）

## 犠牲の何が問題か

## 犠牲のパラドクス

- ある者（神）への忠実（自己犠牲）は、他の者（イサク）の犠牲をとまなう。
- ある者（国家）への責任が他者（他国民）への無責任となる。他者に死を与える絶対的犠牲のパラドクスは、戦争において極大化する。（高橋哲哉『国家と犠牲』日本放送出版協会、2005年、230頁）
- 関連課題：絶対平和主義は有効か？
- 状況にかかわらず、この立場が貫かれるとすれば、もっとも無責任な態度となる可能性がある。他者の安全を尊重するようでありながら、他者の具体的な呼びかけには応えようとしていないから。

## 殉教と殉国

元来、殉教は**マイノリティ**の信仰者に起こる。ところが、ある宗教が**マジョリティ**になったり、あるいはマジョリティの側につくと、**殉教の論理**を**殉国の論理**に重ねてしまう。

## 交換の論理

- 殉国も殉教も、命を差し出すことが、模範的な自己犠牲として称賛（顕彰）される。
- 靖国神社における英霊の顕彰、カトリックにおける殉教者の列聖。ここには「交換の論理」が働いている。

## 犠牲とイエスの倫理

## イエスの倫理

- 交換の論理を批判。勸善懲惡の否定。
- 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」（マタイ5:43-45）
- ぶどう園の労働者のたとえ（マタイ20:1-16）

## イエスの倫理

- 徹底した個人倫理（集団倫理を批判）
- 見失った羊のたとえ（ルカ15:1-7）
- 犠牲の内面化（精神化・純化）
- 「もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。」（マタイ12:7）
- 殉教・殉国のない世界を暗示しているのでは？

## まとめ

- 犠牲の論理に対する批判的考察
- 犠牲の論理は形を変えて現代にも受け継がれている。
- 犠牲の人類史的な意味の再評価
- 動物・自然との関係、人間の身体性への気づき
- 犠牲の時間と空間が担っていた「つなぐ力」と「切る力」の身体性を現代人は、どのように回復できるのか（→「宗教」概念の再考）。